福岡教育大学紀要，第71号，第４分冊，75－80（2022）

小学校での生活と幼児教育及び保育施設の方針との関連の探索

Exploring the relationship between life in elementary school and the way of daily life when they were children in early childhood education and care facilities

植　村　善太郎

Zentaro UEMURA
福岡教育大学　学校教育ユニット

（令和３年９月30日受付，令和３年12月23日受理）

Abstract

In order to examine the relationship between the educational environment in early childhood and later life style, we obtained data from 488 mothers of first-grade elementary school children on the policies of the institutions their children attended before school and on the current life style of their children. The results showed that children who attended institutions with warm institutional policies that respected children's autonomy tended to have better academic and interpersonal adjustment in the first year of elementary school. On the other hand, emphasis on discipline and learning in pre-school facilities did not have a clear relationship with life after school. The results and future issues are discussed.

キーワード：就学前施設，小学校，子どもの適応
Keywords: pre-school facilities, elementary school, adjustment of children

問　題

幼稚園や保育所での生活様態とその後の生活のあり方との関連には，教育および養育効果の問題として関心が寄せられてきた。Heckman（2013）による経済学からのアプローチ，様々な環境要因の発達への影響を心理学的に考察したSchaffer（1998），家族心理学の観点から子どもが育つ条件を考察した柏木（2008）など，多くの研究が存在する。また，学術的な考察とは別に，幼稚園や保育所での生活がその後の子どもの生活に影響すると多くの人が考えていることを示唆する事象もある。例えば，インターネット上には，幼稚園や保育所の評判，ランキングなどの情報が数多く掲載されている。多くの人が，子どもの将来と幼稚園や保育所での生活とに関連性があると考えているからこそ，出来るだけ良質な幼稚園や保育所の情報を欲するのだと考えることが出来る。幼児教育の効果は，学術的にも社会的にも関心が高いテーマといえよう。

幼児教育の効果を扱った研究には様々なものがある。山下・首藤（2005）は，幼稚園・保育所における動物飼育経験が子どもに及ぼす影響について先行研究を展望している。保育者を対象とした研究そして子どもの事例研究からは，優しさ，思いやり，命の大切さの認識，生き物への興味関心などを育成する効果がみられたとされているが，一方で研究手法の限界があるとされている。木田・武田・荒川・大久保（2013）は，幼稚園を対象に，野菜栽培活動の効果を検討した結果を報告している。子どもが関わる栽培活動の頻度が週１回以上の園は，そうでない園に比して，「食

べ物に興味・関心を示す子どもがふえた」,「嫌いなものでも頑張って食べようとする子どもが増えた」などの得点が高いことがわかった。片桐・長谷川・福本・石川（2020）は，幼稚園における「絵本の読みあい遊び」の効果を検討し，子どもの絵本に関わる発話量，指さしや接近といった積極的な行動，対人的スキンシップの増加が見られたことを報告している。小林・岩田・岩田・米﨑（2017）は，ある幼稚園を対象に，劇遊びが人間関係能力発達を促進する可能性があることを明らかにしている。

これらは，レビュー（展望）研究，子どもの行動を直接検討した研究，保育者や保護者といった大人を対象とした研究など，様々であるが，教育的な取組が子どもに一定の効果をあげることを示している点では一貫している。幼児に対する教育的関わりが何らかの効果を持つことは明らかになっているといえよう。

その一方で，こうした研究の多くが，効果，意義として取り上げているものは，その内容や程度にかなりのばらつきがあることも事実である。さらに，多くが短期的な効果を扱っており，例えば，ある取組を続けた1年後に，子どもにどのような変化が生じているかを検討したような研究は少ない。こうした中長期の効果を検討すること自体が方法的に難しいことが，その主たる理由ではないかと推測される。しかし，実際にどのような教育環境の提供が子どもの発達にとって有効なのかを考察するためには，中・長期的な視点での検討も重要であると考えられる。

そこで，本研究は，小学校1年生の子どもを持つ母親を対象に，過去の幼児教育関連施設での子どもの過ごし方，そして，現在の子どもの様子について尋ね，幼児期の過ごし方と小学校1年時の様子との関連を検討することにした。

方　法

調査の方法

楽天インサイト株式会社を利用して，オンライン調査を行った。2021年2月に全国の小学校1年生の母親500名からデータを得た。子どもが就学前に通っていた施設を尋ねたところ，幼稚園223，保育所180，認定こども園85，通っていなかった6，その他6であった。調査の趣旨に鑑みて，通っていなかった6名とその他6名とを分析対象から除外した。その結果，分析対象は488名となった（平均年齢39.28歳，標準偏差4.66，最小値26歳，最大値51歳）。

人権への配慮として，回答結果は調査会社における「個人情報保護方針」に則って取り扱われ，プライバシーが侵害される恐れがないことが説明された。そして，それに対して同意を得た上で調査を実施した。

調査内容

(1) デモグラフィック

回答者の年齢，子どもの人数，対象児の性別及び出生順位，対象児が就学前に通っていた施設の有無と種別について尋ねた。一部の結果は，前述の通りであった。

(2) 施設の方針

就学前に子どもが通っていた施設の教育あるいは保育の方針，施設の雰囲気，教育あるいは保育の内容について尋ねた。質問項目は，独自に14項目設定した（Table 1）。遊びが中心だったか，文字などの学習が多かったか，子どもの自主性を尊重していたか，信頼できたかといったことを項目化した。それぞれについて,「ぜんぜん違う」（1点）から「非常にそうだ」（6点）の6件法で評定させた。

Table 1　就学前に通っていた施設の方針を尋ねた項目

1.子どもの遊びが時間の多くを占めていた
2.文字，算数，楽器，体育などをみんなで規律正しく学ぶことが多かった
3.屋外での活動が多かった
4.スポーツなどの専門の指導者が教えに来ることが多かった
5.のんびりしていた
6.きっちりしていた
7.厳しかった
8.子どもの意見や考えを，担当スタッフはよく聞いていた
9.子どもの自主性を引き出す努力がされていた
10.子どもが行くのを楽しみにしていた
11.子ども同士の仲が良かった
12.スタッフ同士の仲が良さそうだった
13.信頼できる施設だった
14.いい先生（スタッフ）が担当してくれた

(3) 小学校入学後の生活の様子

小学校入学後の子どもの生活の様子を独自に作成した12項目で尋ねた。学習状況，友人関係，学習への積極性，家庭内での会話などについて尋ねた。質問項目は，Table 2にまとめた。それぞれについて，「ぜんぜん違う」(1点）から「非常にそうだ」(6点）の6件法で評定させた。

Table 2　入学後の子どもの生活の様子を尋ねた項目

1.学校の授業はよく理解できている
2.学校に行くのをいやがってはいない
3.学校で，仲のいい友だちがいる
4.学校での友だちは多いほうだと思う
5.放課後に，友だちとよく遊んでいる
6.学校の先生から，褒められることが多い
7.学校の各科目のテスト結果は，全般的に良好だと思う
8.家で，学校の話をよくする
9.宿題はきっちりと行っている
10.友だちとのコミュニケーションがうまいほうだと思う
11.国語は得意なほうだと思う
12.家族の中で，よく話をするほうだと思う

結　果

デモグラフィック項目の検討

回答者の子どもの人数は，次のようであった(Table 3)。

Table 3　参加者の子どもの人数

1人	2人	3人	4人	5人	7人
99	257	108	16	7	1

下段の数値は頻数

「2名」が全体の半数以上を占めていた。「3名」および「1名」がそれぞれ100名前後という結果であった。

対象児の性別と出生順位については，次のようであった（Table 4)。全体では男児がやや多かった。出生順位については，第1子が半数以上を占めていた。

Table 4　対象児の性別と出生順位のクロス表

出生順位	男児	女児	計
1	154	134	288
2	77	67	144
3	34	15	49
4	3	1	4
5	1	2	3
計	269	219	488

表中の数値は頻数

尺度の検討

(1) 施設の方針

因子分析（最尤法，オブリミン回転）を実施し，固有値の減衰状況，因子構造の解釈しやすさを考慮して，2因子を抽出した（Table 5)。

第1因子は，施設およびスタッフが信頼できたこと，子どもの意見や考えが尊重されていたこと，子どもが施設を好んでいたことに関する項目が集まっており，子どもを大切にした信頼される運営をしていたことと捉え，「子ども尊重」と命名した。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した（α=.90)。

第2因子は，文字や算数の学習を規律正しく学ぶこと，厳しくきっちりしていたこと，スポーツなどの専門指導者の来園が多かったことなどが集まっており，「規律・学習の重視」と命名した。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した（α=.80)。

(2) 小学校入学後の生活の様子

施設の方針と同じく，因子分析（最尤法，オブリミン回転）を実施し，固有値の減衰状況，因子構造の解釈しやすさを考慮して，2因子を抽出した（Table 6)。

第1因子は，学習への取組が良好であることが共通性となっていると考え，「学業への適応」と名付けた。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した（α=.83)。

第2因子は，学校での対人関係の良好さが共通した要素であると考え，「対人関係への適応」と名付けた。この因子に最も高く負荷した項目で下位尺度を構成した（α=.80)。

各尺度の得点は総和して，項目数で除することで1項目あたりに換算した（Table 7)。

Table 5　施設の方針に関する項目の因子分析結果（最尤法，オブリミン回転後）

		F1	F2
F1 子ども尊重 （α=.90）	13. 信頼できる施設だった	**.90**	.07
	14. いい先生（スタッフ）が担当してくれた	**.85**	.05
	8. 子どもの意見や考えを，担当スタッフはよく聞いていた	**.78**	−.04
	12. スタッフ同士の仲が良さそうだった	**.76**	.03
	9. 子どもの自主性を引き出す努力がされていた	**.75**	−.06
	11. 子ども同士の仲が良かった	**.71**	−.06
	10. 子どもが行くのを楽しみにしていた	**.69**	−.07
	3. 屋外での活動が多かった	**.39**	−.25
F2 規律・学習の 重視 （α=.80）	2. 文字，算数，楽器，体育などをみんなで規律正しく学ぶことが多かった	.07	**.75**
	6. きっちりしていた	.22	**.74**
	7. 厳しかった	−.13	**.67**
	1. 子どもの遊びが時間の多くを占めていた（＊）	.26	**−.59**
	5. のんびりしていた（＊）	.22	**−.57**
	4. スポーツなどの専門の指導者が教えに来ることが多かった	.07	**.50**
	因子間相関　F2	−.13	

＊がついた項目は，逆転項目である。

Table 6　入学後の生活の様子に関する項目の因子分析結果（最尤法，オブリミン回転後）

		F1	F2
F1 学業への適応 （α=.83）	1. 学校の授業はよく理解できている	**.87**	−.05
	7. 学校の各科目のテスト結果は，全般的に良好だと思う	**.87**	−.05
	11. 国語は得意なほうだと思う	**.57**	.20
	9. 宿題はきっちりと行っている	**.50**	.11
	6. 学校の先生から，褒められることが多い	**.50**	.25
F2 対人関係への 適応 （α=.80）	4. 学校での友だちは多いほうだと思う	−.08	**.85**
	10. 友だちとのコミュニケーションがうまいほうだと思う	.09	**.69**
	3. 学校で，仲のいい友だちがいる	.06	**.67**
	5. 放課後に，友だちとよく遊んでいる	−.13	**.57**
	8. 家で，学校の話をよくする	.30	**.47**
	12. 家族の中で，よく話をするほうだと思う	.26	**.41**
	2. 学校に行くのをいやがってはいない	.25	**.34**
	因子間相関　F2	.48	

施設の方針と小学校入学後の生活との関連

就学前に通っていた施設の方針，そして小学校入学後の生活について，因子分析結果に基づいて，それぞれ2つの下位尺度を構成した。これらの尺度間の相関係数を算出したところ，次のような結果が得られた（Table 8）。

子どもを尊重する施設のあり方と，小学生1年生時の学業への適応，そして対人関係への適応とは，正に有意に相関することが明らかになった。特に，対人関係への適応については，相関係数が.42で中程度の相関があった。就学前施設を離れてほぼ1年後の調査であることを考慮すると，相関係数は低くないと評価できる。

一方，規律・学習の重視については，学業への適応と対人関係への適応の両方と明確な相関関係を示さなかった。

考　察

施設の方針が小学校入学後の生活に及ぼす影響

Table 8に示されたように，就学前の施設において，子どもを尊重した，いわば「あたたかい」関わりが行われていることが，小学校入学後の子どもの学業及び対人関係への適応にプラスに関連していることが相関分析から見いだされた。

その一方で，学習や規律を重視した方針は，子どもの入学後の生活様態との関連性がはっきりしなかった。小学校入学以降の子どもにプラスの影響があることを期待して，就学前の「学習」活動や規律の重視は導入されることが多いと推測されるが，本調査結果からは，そうした期待されるような関連性は見いだされなかった。

ペリー就学前プロジェクトでは，子どもの自発性を大切にした教育活動による非認知能力の改善効果は長期にわたって持続するといわれている（Heckman，2013）。本研究では直接的な介入を行っておらずデータは間接的であるが，幼児期における子どもを尊重した関わりが小学校入学後の子どもの生活適応に関連することが示唆された。この結果は，Heckman（2013）による考察と一致した方向性を持つものといえる。子どものより良い発達のために，子どもの自主性を重視した保育および教育が重要であることが示されたと考えられる。

本研究の課題

本研究は，母親からデータを得ており，就学前の施設の様子，そして小学校入学後の子どもの姿については，すべて母親の目を通したものである。したがって，実際に子どもが体験したこと，あるいは施設が実際に提供したことと，母親の認知とに一定のズレがあることが考えられる。こうしたズレには母親と施設との関わりの程度に関する個人差などの影響が考えられるが，本研究ではそうした変数を把握しておらず，ズレの程度を統制することも困難である。また，小学校入学後の子どもの様子についても，子どもの実際の内面状

Table 7　構成した下位尺度の記述統計量

	N	*M*	*SD*	Median
施設の方針				
子ども尊重	488	4.50	0.75	4.50
規律・学習の重視	488	3.21	0.82	3.17
入学後の生活の様子				
学業への適応	488	4.25	0.83	4.20
対人関係への適応	488	4.32	0.78	4.29

Table 8　施設の方針と小学校入学後の生活の様子との相関分析

	子ども尊重	規律・学習の重視	学業への適応	対人関係への適応
施設の方針				
子ども尊重		−.19**	.28**	.42**
規律・学習の重視			.07	−.01
入学後の生活の様子				
学業への適応				.57**
対人関係への適応				

** $p<.01$，* $p<.05$

態や行動をどの程度捉えることができているかについては，本研究データから検討することが出来ない。ここで得られた分析結果は，あくまでも母親の目を通した結果であり，今後の研究において，本研究結果を確認していく必要がある。その際には，子どもへの対応についての施設からのデータ採取，縦断的なデザインによる子どもの行動データの収集などが必要になるであろう。

本研究で使用した尺度は，この研究のためにすべて独自に開発したものであった。各尺度の内的整合性は確認されているものの，尺度としての妥当性については，本研究においては検討するに至っていない。就学前施設の方針をとらえる尺度として，そして，就学後の子どもの生活をとらえる尺度として，今後の継続的な検討が求められる。

また，本研究では，こどもが持っている個人差を考慮していない。対人関係を構成する力のひとつとしてのコミュニケーション力や，学習に取り組む力，その他気質など，小学校入学後の子どもに影響する個人差は様々想定することが出来る。こうした個人差と，幼児期の施設の方針との間には，相互作用の存在が想定されうる。今後は，そうした個人差要因を視野に入れた考察が必要と考えられる。

引用文献

Heckman, J. J. (2013). *Giving Kids a Fair Chance*. Boston: MIT Press.
（ヘックマン，J. J.　古草秀子（訳）(2015). 幼児教育の経済学　東洋経済新聞社）

柏木惠子（2008）．子どもが育つ条件　家族心理学から考える　岩波書店

片桐正敏・長谷川茉奈・福本那奈・石川由美子（2020）．絵本の読みあい遊びが子どもの言動に及ぼす効果について：市内 A 幼稚園における予備的検討．北海道教育大学紀要．教育科学編，*70*(*2*)，99-109.

木田春代・武田　文・荒川義人・大久保岩男（2013）．幼稚園における野菜栽培活動の状況とその食育効果―北海道某市での調査．天使大学紀要，*13*(*2*)，1-11.

小林　真・岩田夏実・岩田育代・米﨑瑛美（2017）．保育内容（人間関係）の観点から見た劇遊びの意義：富山大学人間発達科学部附属幼稚園におけるこどもまつりの教育的効果の検討．教育実践研究：富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要，*12*，171-179.

Schaffer, H. R. (1998). *Making Decisions About Children. 2nd Edition* New Jersey: Willey-Blackwell.
（シャファー，H. R.　無藤　隆・佐藤恵理子（訳）(2001). 子どもの養育に心理学がいえること　発達と家族環境　新曜社）

山下久美・首藤敏元（2005）．幼稚園・保育園の動物飼育状況と飼育体験効果に関する研究展望：子どものムシとの関わりに関する研究に注目して．埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，*4*，177-188.